支部だより

「残す」ということ

萩支部　今福　啓喜

建築の仕事をしていると、「つくる」ことについて考える機会はたくさんあります。しかし最近、私は「残す」ということについて考えることが多くなりました。

きっかけは、吉田松陰先生の墓所です。

萩市椿東にある吉田松陰先生の墓所では、長年「松陰先生の墓を守る会」が清掃やしきびの入れ替えなどを続けてきました。私の父もこの会に関わり、会長を務めていました。その父が亡くなり、私が活動を引き継ぐことになりました。



【萩市椿東の吉田松陰墓所】

子どもの頃から知っている場所ですが、自分が実際に墓所を守る側になると、それまでとは少し違って見えるようになりました。

墓所に行けば落ち葉が積もり、草も生えます。しきびも定期的に替えなければなりません。歴史ある場所だからといって、何もしなくてもその姿が残っていくわけではありません。

これまで墓所を守ってこられた方々も高齢になり、以前と同じように活動することが難しくなっています。私自身も会社を経営しながらですから、できることには限りがあります。

そんな中で、建築の仕事とどこか似ているなと思うようになりました。

私たち建築士は、新しい建物を考えたり、家を建てたり、改修したりします。しかし、建物は完成した瞬間がゴールではありません。人が住み、手入れをし、修理をしながら使い続けることで、その場所は残っていきます。

墓所も同じなのかもしれません。どれほど歴史的に大切な場所でも、最後は誰かが草を取り、落ち葉を掃き、傷んだところに気づく。そうした地道な作業の積み重ねによって、その風景が次の世代へ渡っていきます。

家も、墓所も、地域の風景も、誰かが手を入れ続けなければ残っていきません。



【清掃作業の様子】

萩には、歴史的な建物や町並み、墓所など、先人から受け継いできたものが数多くあります。私もこれまでは、それらを「見る側」だったのかもしれません。しかし今回、思いがけず「守る側」に回ることになりました。

父から十分な引き継ぎを受けることもできず、まだ分からないことばかりです。それでも、まずは自分のできる範囲で墓所へ行き、手を動かすことから始めています。

建物をつくることも大切ですが、今あるものをどう残していくのか。建築士として、そして萩で暮らす一人として、これから少しずつ考えていきたいと思っています。